



主張

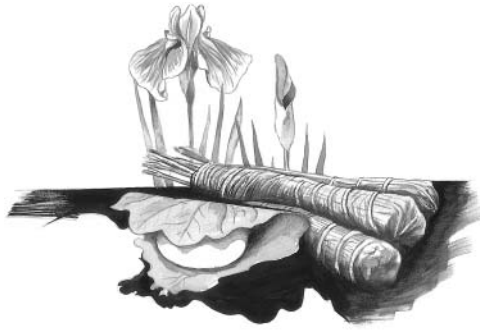
大学入学共通テストと新学習指導要領

北園 博之

大学入試が大きく変わる。新しい入試制度が導入されるのは、今年高校に入学した一年生が大学を受験する平成三十二年度からである。主として知識の量を中心に出題していた入試から、「学力の三要素」について多面的・総合的に評価する入試に変わるといふ。その三要素とは、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性を持つて多様な人々と協働して学ぶ態度」である。

昨年の暮れに、大学入学共通テストに向けた試行調査が行われた。国語では、形式の異なる複数の文章や資料を読み比べて情報を整理し、記述させる問題が出題されるなど、知識活用力が問われる問題が出題された。大学入試の出題形式が変わると当然高校での授業も変わる。すなわち、前述した「学力の三要素」を意識した授業が主流となるだろう。

昨年三月に新学習指導要領が公示された。特筆するのは、子供たちの生きる力を育むために、授業の創意工夫や改善が図られるよう、全ての教科等を、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理した点である。これにより、各教科等で目指す資質・能力が明確となった。さらに、この三つの柱は、前述の大学入学共通テストでねらう「学力の三要素」にも当てはまる。これからの変化の激し



い時代に生きる人間を育成するため、幼稚園から小・中学校、そして高等学校まで、一貫した教育の実践に取り組む文部科学省の意欲が見て取れる。

さらに、知識の理解の質を高め、資質・能力を育むために、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業が授業改善の視点として示された。改定案の段階では、「アクティブ・ラーニング」という言葉で、授業改善の視点が示されていたが、定義が定まっていないことや画一的な手法が現場に浸透することを避けたということ、この文言は消えた。ところが、アクティブ・ラーニングという文言が消えたことで、「これまでどおりなんだ。」という声の一部が聞かれるようになった。しかし、これでは、文部科学省がねらう授業改善にはならない。大学入試改革が行われようとしている今こそ、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業について研修を深めていくことが必要だ。特に、「深い学び」に至る生徒の姿や思考過程を各教科で明確にしていくことが大切である。これを通して深い学びを実現する学習プロセスを構成することができる。

独立行政法人教職員支援機構の組織の一つである「次世代型教育推進センター」のWebページに、主体的・対話的で深い学びに関する授業実践事例やアクティブ・ラーニングを理解するための研修プログラムが掲載されている。各学校では、これらの実践事例やプログラムを職員研修等で活用し、教員の資質向上を図っていくことが重要である。

今後、新学習指導要領の周知が図られ、中学校では平成三十三年度から全面实施されることになる。新しい大学入学共通テストを受験するのは、現在、在籍している中学生であることを念頭に置き、新学習指導要領の理解と授業改善に向けた研修に取り組む必要がある。

（全日中副会長・前鹿児島市立伊敷中学校長）